



監督＝イ・ジェヨン／原作＝ピエール・ショデルロ・ド・ラク
 原著『危険な関係』／脚本＝
 イ・ジェヨン／出演＝キム・デ
 ヴ／キム・ヒョンジョン／ペ・
 ヨンジュン／イ・ミスク／チョ
 ン・ドヨン（シネカノン、松竹
 配給／2003年韓国映画／124分）

韓国ドラマ『冬のソナタ』で大ブレイクした、ヨン様こと「ペ・ヨンジュン」の映画初出演作。『冬ソナ』のイメージを完全に封印し、18世紀の李王朝時代の衣裳に身を包んだプレイボーイの姿がそこにある。18世紀のフランスの書簡体による恋愛小説『危険な関係』を、儒教思想が強く残る18世紀の朝鮮に移しかえたのがミソ。ミエミエの「落としのテクニク(?)」には思わず笑いも湧くが、次々と展開される恋愛心理の描写はあなたも大いに勉強になるはず……？

🎬 話題は『冬ソナ』の「ヨン様」一色

たまたま、私がこの映画を観たのが、6月1日の「映画サービスデー」だったからかもしれないが、館内はほぼ満席。この映画の人気の根源は、何ととっても大フィーバーした韓国ドラマ『冬のソナタ』のヨン様こと「ペ・ヨンジュン」。80作以上のオファーの中から彼が選んだ映画初出演作だから、なおさらだ。現代版の韓国恋愛（純愛）ドラマである『冬ソナ』は私も何回か観たが、ミエミエのストーリーながら、たしかにヨン様は魅力的！

そのヨン様がこの映画では、18世紀の李朝後期の王朝衣裳に身を包むプレイボーイとしての登場だから驚き。『冬ソナ』での、メガネと柔らかな髪、そしてファッションナブルな着こなしが魅力のヨン様が、李王朝の大きな冠をかぶり、口髭をたくわえるとまるで別人。私にはそんなにカッコいいとは思えないが……？

🎭 不倫とスキャンダルは洋の東西を問わず！

不倫とスキャンダルは洋の東西を問わず、永遠のテーマ。ヨーロッパでも「不倫本」は、昔から大ヒットしていたらしい。この映画の原作となったのは、その大ヒットした不倫本の1つである、『危険な関係』。これは、フランスの作家ピエール・ショデルロ・ド・ラクロ（1741～1803年）が1782年に出版した書簡体の恋愛心理小説。この原作はよほど人気があるとみえて、次のようにくり返し映画化されてきた。

- ① 1959年、ロジェ・ヴァデム監督で、ジェラルド・フィリップとジャンヌ・モロー主演の『危険な関係』
- ② 1976年、再びヴァデム監督で、シルヴィア・クリステルとナタリー・ドロン主演の『華麗な関係』
- ③ 1988年、スティーヴン・フリアーズ監督で、グレン・クローズ、ジョン・マルコヴィッチ、ミシェル・ファイファー、キアヌ・リーヴス、ユア・サーマンら出演の『危険な関係』
- ④ 1989年、ミロス・フォアマン監督で、コリン・ファース、アネット・ベニング、メグ・ティリー主演の『恋の掟』

これらの「洋モノ」に対して、この韓国で、時代を18世紀の李王朝後期としたのは、^{ヤンバン}両班と呼ばれる特権貴族階級による強固な身分制度と、儒教の考えが根強く残る中での極端な男尊女卑の思想の時代設定によって、より強烈に不倫とスキャンダルを浮かびあがらせる狙いだ。

日本人も不倫モノは大好き(?)だから、江戸時代のカッコイイ、身分いやしからぬプレイボーイ(?)の上級武士を主役とし、ご家老の奥方と結婚前に夫に急死された貞淑な人妻という組み合わせの日本ヴァージョンを企画すれば大ヒットするのでは……? 坂和プロデューサーの発想では、さしずめプレイボーイ役は石田純一(島田紳助も意外に面白いか?)、奥方役は十朱幸代、または浅野ゆう子、加賀まりこ、大竹しのぶあたり、そして貞淑な人妻役は黒木瞳または松嶋菜々子、沢口靖子、菅野美穂あたりか……?

3人の主人公たちと公序良俗に反する賭け(?)

この映画の主演は、男性のチョ・ウォン（ペ・ヨンジュン）と女性のチョ夫人（イ・ミスク）、女性のチョン・ヒヨン（チョン・ドヨン）の3人。チョ・ウォンは領主様と呼ばれる貴族だが、妻と死に別れた後、官職にもつかず、詩や絵画を楽しみながら、女性を「落とす」ことだけを楽しみに生きているプレイボーイ。チョ夫人は政府高官ユ長官の妻だが、子宝に恵まれない。そのため、夫は16歳の側室ソオク（イ・ソヨン）を迎えようとしているが、チョ夫人は表面上これをスンナリと受け入れ、婚礼のアドバイスをするなど、妻の「鑑」……。ところが、それはあくまでオモテの顔であり、ウラの顔は正反対。今でも自分を初恋の人だと慕ってくる、プレイボーイのチョ・ウォンとは気が合う仲だし、地方出張の多い夫の留守中は浮気三昧の日々を送っている。

そんなチョ夫人がチョ・ウォンに提案したのは、「チョ・ウォンがソオクを誘惑して妊娠させて欲しい」ということ。夫が死ぬ時に、ソオクとの間に生まれた子供が実は自分の子ではなく、チョ・ウォンの子供だったことがわかればどんな気持か、それを考えただけでも楽しくなってくる、というわけだ。イヤハヤ女は恐ろしい……？

これに対するチョ・ウォンの答えもニクい。つまり、自分にとっては16歳の娘を「落とす」ことなど、簡単すぎて面白くない、というのだ。そこで、チョ・ウォンが打ち明けたのは、自分の狙いはチョン・ヒヨンにあるということ。

チョン・ヒヨンは結婚前に夫が急死したため、その後ずっと貞節を固く守り続けている27歳の未亡人。そこで、チョ・ウォンとチョ夫人との間に成立した「賭け」は、チョ・ウォンがチョン・ヒヨンを「落とす」ことができるかどうか、ということ。もし落とせたら、そのご褒美は……？

それはここでは言わないでおこう。しかし、もし落とせなかったら、そのペナルティーは、チョ・ウォンが僧侶になること。この賭けが、「公序良俗に反する」ことは明白だが、何はともあれ、チョ・ウォンとチョ夫人との間に、「賭け」が成立した。こうなると男は単純。その目標に向かって、チョ・ウォンは一気にかげ出した。

♣ 共犯関係(?)の成立は、ほぼ原作と同じ

この映画の原作となった、ラクロの『危険な関係』では、チョ・ウォンに相当する色男がヴァルモン子爵であり、チョ夫人に相当するのがメルトイユ公爵夫人。メルトイユ公爵はかつての愛人への恨みから、その15歳の婚約者のセシル・ヴォランジュを墮落させるため、ヴァルモン子爵に彼女の誘惑を依頼。ヴァルモン子爵はツールヴェル法院長夫人を誘惑しようとしていたが、セシルの母ヴォランジュ夫人がヴァルモン子爵を中傷していることを知ったため、ヴォランジュ夫人への復讐を決意し、ここにヴァルモン子爵とメルトイユ公爵夫人との、これも公序良俗に反する「共犯関係」が成立することになる。

不倫とスキャンダルをめぐる、このような基本的な人物像と人間関係を把握しておくことは、ストーリーの理解とその面白さを楽しむために不可欠だが、あとは映画も原作も、女性への口説きのテクニクと、それに揺れる女心のサマをタププリと楽しめばよい……。

♣ チョ・ウォンの口説きのテクニクは……?

さすがプレイボーイのチョ・ウォン。動きは素早い。チョン・ヒヨンが通う天主教への寄付、チョン・ヒヨンの帰り道での待ち伏せ、暴漢にチョン・ヒヨンを襲わせた上でのカッコいい救出劇など、ミエミエの手練手管ながら、その行動は一途。イヤよ、イヤよと言ってはいても、このような一筋の強力な攻勢に女は弱いもの……?

さらにもう1つのテクニクは、ラブレター攻勢。ラクロの原作の中にも、ハットするような口説きの名文句や、シャーシャーとした嘘つき文句がたくさんあるが、この映画の中で語りかける、チョ・ウォンのチョン・ヒヨンに対するラブレターの魅力は、かなりのもの。思わずこの映画のシナリオを買って、オレも勉強しなければと思ったほど……?

♣ 木村佳乃に似たチョン・ヒヨンさん、ちょっとかわいそう……?

チョ・ウォンもチョ夫人もかなりのクセ者で、畳の上で死ぬことができないよ

うな人物。多分これは本人たちも覚悟のうえ……。そして結果的にも……。しかし、ジョン・ヒョンは違う。彼女は純粹でいい人。自分の生まれた時代と与えられた運命の中で、しっかりと生きている健気な女性だ。結婚前に夫が死亡したため、処女のまま固く貞節を守って生きている女性ジョン・ヒョンに対して、攻勢を仕掛けこれを「落とす」意欲にかられるのは、プレイボーイとして当然……？

しかし、ちょっとチョ・ウォンのやり方はズルい。また、ラブレターの中身も嘘だらけ。もっともこれは、プレイボーイの女の口説き方としては当然。なぜなら、本気になったら、それは既に、ゲームでも賭けでもなくなるし、何よりもプレイボーイの名に値しなくなってしまうから。

何度追っても逃げていくジョン・ヒョンをカンファ島まで追って行ったチョ・ウォンは、そこで、「あなたをあきらめます。そして、1人広い清の国へ行きます」と心にもない殊勝なことを言いつつ、他方で、「でも今晚は一夜、近くに泊まっていますので……」とも。いわば、最後の大バクチ……？

さらに、これでオーケーとなったところで、むやみにセックスを求めず、「君を大切にしたいから……」と殺し文句を放って、グッと我慢するのが優秀な(?)プレイボーイ。これによって、たちまち男女の「綱引きゲーム」の力関係は逆転。ジョン・ヒョンの方からチョ・ウォンに対する想いが高まっていくことに……。そして、ここに至ってのチョ・ウォンとジョン・ヒョンとの「愛の一夜」は、最高のものになるのは当然。しかし、その後は……？

ジョン・ヒョンは日本でいえば、木村佳乃に似た顔立ちのかわいい女性。ホントに貞淑な未亡人として生きてきた、心優しい女性。その女性が、チョ・ウォンのようなプレイボーイから迫られて、落とされ、その挙げ句にポイと捨てられるのは、いかにもかわいそう……？

チマ・チョゴリの色彩は鮮やかだが……

3人の主人公たちを中心とした色恋ゲームとスキャンダル物語を美しくさせているのは、18世紀後期の李王朝時代の豪華な衣裳。もっともパンフレットによると、韓服(チマ・チョゴリ)も朝鮮民族は、「白衣民族」であるため、ホント

はこの映画のようなハデな色彩のものではないとのこと。しかしそれでは、貞淑なチョン・ヒョンはいいとしても、妖艶なチョ夫人の色香と権力を表現することができないため、あえて時代考証を無視して、華麗な色調にしたとのことだ。

チョ夫人が頭の上に高く大きく編み上げた髪も権力の象徴で、そのセットや手入れは大変だろうと思うが、私はあまり魅力を感じない。刺激的(?)なのは、いよいよ……という段になって、チョン・ヒョンと向きあったチョ・ウォンが髪から櫛を抜くシーン。さあ、本番(?)という雰囲気が充満するムード満点の生ツバドッキリモノ……? こんなことを書くから、スケベおやじと言われるのだろうか……?

最後の結末は……?

「遊び人」の結末は、不幸なもの「相場」が決まっている。そうでなければ、真面目に生きている人とのバランスがとれないことになるから、神サマはお見通しなのだ……。その「相場」どおり、チョ・ウォンの結末は悲惨。そして、チョ夫人も……? しかし、チョン・ヒョンは……?

この映画を単なるプレイボーイ物語だけに終わらせず、この映画に深みを持たせているのは、プレイボーイで女泣かせのチョ・ウォンにも意外に誠実なところがあり、傷つきやすい心を持っていたことが明らかにされること。それは、遂にチョン・ヒョンを「釣りあげ」たことによってゲームが終わったと満足し、チョン・ヒョンをつき放してしまったチョ・ウォンが、自分でも自分がわからなくなるほど、傷ついていることを認識したことだ。

つまり、チョン・ヒョン獲得の「賭け」は、実はチョ・ウォンにとってはゲームではなくなってしまっていたわけだ。そんなチョ・ウォンの心の葛藤が、この映画に深みを持たせていることはまちがいない。しかし、それにしてもちょっと贅沢な心の葛藤だと思うが……?

2004(平成16)年6月2日記